

女性研究者・技術者委員会ニュース

No. 28 2015年9月20日

連絡先：日本科学者会議全国事務局 Tel：03-3812-1472、Fax：03-3813-2363

e-mail: zenkoku@jsa.gr.jp ホームページ <http://www.jsa-tokyo.jp/woman/index.html>

目次

- 1 女性研究者・技術者委員会委員長挨拶 朴木佳緒留(神戸大学名誉教授)
- 2 特集「第14回女性研究者・技術者全国シンポジウム」
- 3 第48期 第2回女性研究者・技術者委員会 議事録
- 4 各地・各分野の話題 沖縄—平和を考える旅(留学生から)

1 女性研究者・技術者委員会委員長挨拶

女性研究者・技術者委員会委員長に就任のご挨拶

この度、澤山美果子さんの後を引き継ぎ、女性研究者・技術者委員会の委員長をお引き受けすることになりました。

2015年は女性参政権獲得70年、女性差別撤廃条約批准30年、第4回世界女性会議(北京会議)から20年、そして戦後70年とさまざまな節目にあたる年です。この間、多くの前進があり、同時に大きな課題も残されています。日本の女性の経済社会への参画、なかでも意思決定過程への参画の少なさは国際的にも問題視されるほどです。そのためか、経済発展を目指す文脈の下で、9月8日に「女性活躍推進法」が成立し、そして「労働者派遣法」も問題含みのまま「改正」の運びとなっています。経済発展の旗印の下で女性の背中を押しつつ、他方で足を引っ張るような事態と思います。当然のことながら、女性研究者・技術者もこの複雑な事情の中に置かれています。

長い間、女性たちは意思決定過程に関わること少なく、またそれを疑問視しない雰囲気の中で職務に励んできました。いまだに、研究者や技術者といえば男性がイメージされることが多く、「責任者」としてTV等のメディアに登場する人のほとんども男性です。この事情を覆すことは容易ではなく、私の委員長任期中に変革できるとも思えません。しかし、変革を信じて前に進むことはできると思います。本年6月に開催された「第14回女性研究者・技術者シンポジウム」は前進の勇気を与えるものでした。これを委員会内外の活動の原動力に転化しましょう。

戦後70年の今、「国のかたち」が変えられるかもしれない重大な事態に至っています。言うまでもなく、ジェンダー平等は平和であってこそ成り立ちます。若い人々の平和を求める行動に共鳴しつつ、私たちも「一歩」を進めることができると願っております。もとより委員長が頑張れば前進できるわけではなく、皆さまのご協力と協働が必要です。非力ながら委員長職を務める覚悟ですので、皆さま、よろしくご協力、ご支援を下さいますようお願い申し上げます。

2015年9月10日

朴木佳緒留(神戸大学名誉教授)

2 特集「第14回女性研究者・技術者全国シンポジウム」

2-1 シンポジウム概要

①テーマ：「市民とともに社会を変える女性研究者・技術者」

②開催日時・場所：2015年6月14日(日)10:30~17:30、 日本大学歯学部

③目次

*実行委員長あいさつ「第14回シンポジウムの趣旨と2015年に開催される特別の意義」

伊藤セツ(昭和女子大学名誉教授)

*基調講演「安倍政権下の女性研究者支援―課題と展望―」

朴木佳緒留(神戸大学名誉教授)

*報告1 女性研究者・技術者をとりまく困難とその解決への取り組み

―法制度/大学院生/非常勤講師

打越さく良(さかきばら法律事務所 弁護士)、佐藤和宏(全国大学院生協議会前議長)、
松村比奈子(首都圏大学非常勤講師組合委員長)

*報告2 困難を克服して進む若手女性研究者

簗輪明子(名城大学助教)、杉橋やよい(金沢大学准教授)、
吉田仁美(岩手県立大学専任講師)

*特別報告 退職後をどう生きる

横田綾子(元島根大学教員)、登谷美穂子(元京都大学教員)

2-2 シンポジウムまとめ

①実行委員会について

昨年(2014年)9月の女性研究者・技術者委員会(女性委員会)で第14回女性研究者・技術者全国シンポジウムを東京で開くことが決まりました。早速、東京支部の応援を得て実行委員会立ち上げに着手、女性委員会委員全員、東京支部事務局長、総務財政担当委員、東京支部の女性の常任幹事・幹事などにお願ひしました。他に、現役や退職後間もない女性大学教員にも実行委員になっていただくようお願ひしました。大学教員の異常な忙しさは、大学「改革」が進む中でますますひどくなっており、女性大学教員が女性研究者・技術者運動に参加できる余地はほとんどない状況です。しかし、それだからこそ、こうした人たちの実行委員会への参加は大きな意味があり、また、これから研究者を目指す院生や若い非常勤講師にとってはメンター・ロールモデルとしての期待もありました。こうした依頼に応じていただいた方たちによって、23人の実行委員会が立ち上がりました。実行委員長は伊藤セツさんが引き受けてくださいました。伊藤さんは、昭和女子大学名誉教授、専門は社会政策、女性問題・運動(ご本人のブログから)です。最近の著書『クララ・ツェトキーン ジェンダー平等と反戦の生涯』*(御茶の水書房、2013年)で学術賞を受賞されています。退職後も研究と地域の活動に多忙な中、貴重な時間をシンポのために割く決意をしてくださりました。

企画・実務は東京支部所属の実行委員で構成される現地実行委員会によって進めることとなりました。現地実行委員会は、シンポ終了後も含めて7回開催。意思統一と顔合わせのための全員参加の実行委員会も1回開きました。

②テーマと講師の決定

安倍政権は、女性の活躍推進を経済成長戦略の目玉として打ち出しています。しかし、実行委員会では、「安倍政権の女性活躍推進策では女性間の格差は広がるばかり。本当に活躍できる女性はごく一部」と強い批判の声があがりました。「労働法制の改悪が進む中、非正規雇用が増え、労働者の不安は増している。研究者も、非常勤講師やポストドクターなどの不安定雇用が増え、長期化している。」「研究者・技術者のおかれている状況は他の労働者と変わらない。市民たちとの連帯で社会を変えたい。」「これまでのシンポや総学で積み上げてきた議論を踏まえて、これから何をすべきかを具体的に考えよう」などの意見が出されました。メインテーマ「市民とともに社会を変える女性研究者・技術者」はこうした議論をもとに生まれました。

記念講演については、多くの候補者が挙がりましたが、神戸大学で研究科長、学長補佐などを歴任されて大学執行部の実情に明るく、男女共同参画推進にも実績がある朴木佳緒留さんをお願いしました。

シンポジストとしては、「院生、非常勤講師の問題は最も深刻」「夫婦別姓問題でぜひ話を聞きたい」「苦労話だけでなく、道を切り開いてきた若手の方から話を聞きたい」などの意見が出され、プログラムが編成されました。

③呼びかけの対象をできるだけ広げて

伊藤実行委員長からの「参加者 100 人以上、新入会 10 人を目指す」という提案に応えるには、参加を呼びかける対象を、これまでの枠にとらわれず思い切って広げることがカギと思われました。以下に見るように、JSA と普段からつきあいのある労働組合や市民団体だけでなく、幅広い団体が協賛の呼びかけに応えてくれました。カンパも 3 団体からいただき、一口(1000 円)当たり参加券 1 枚を差し上げました。その他の女性研究者の団体、大学の男女共同参画組織のメンバー、ジェンダー研究者、市民活動家、友人・知人などにも Web や郵送でちらしを送り拡散をお願いしました。多くの方々が大変好意的に受けとめて下さり、JSA の活動を広範な方たちに理解していただく良い機会ともなりました。ちらしやホームページは非常に役立ちました。また、マスコミなどにも積極的によびかけ、「東京民報」「東京新聞」が事前取材して宣伝記事を、「婦人通信」もお知らせを掲載してくれました。

備考) 協賛団体

学研労協・国公労連・首都圏非常勤講師組合・女性労働問題研究会・全院教・全大教・全厚生労働組合・男女共同参画学協会連絡会・日本私大教連・日本女性技術者フォーラム

④成果と教訓

参加申し込みの時点で職種、年齢などについては(プライバシー保護の面も考慮して)調査をしていないため、以下の分析は定性的なものも含まれていますが、過去のシンポの多くに参加してきた筆者の経験もまじえて感想を述べます。

1) 参加者数・入会者数

シンポは、安全保障法案(「戦争法案」)に対する反対運動が急速に盛り上がる中で開かれることになりました。シンポ当日も国会周辺で大々的なデモ・集会が開かれ、「デモに行くか、シンポに参加するか」悩んだ方も多かったようです。午前中だけシンポに参加して、午後はシンポ会場から集会に向かった方も数名いました。そうした状況下にもかかわらず、参加者は

120人(実行委員、報告者、報道関係者、アルバイト、事務局メンバー含む)と目標を大きく超えることができました。120部用意した資料が足りなくなるのでは、と心配なほどでした。入会者数も目標越えでした。

2)「市民とともに」のテーマは達成されたか

参加者の会員／非会員は1／1(60名／60名)。正確な所属を把握していませんが、多くの市民活動家の方に来ていただきました。当日取材の「社会新報」「しんぶん赤旗」の記事(いずれも7月8日号)、「婦人通信」9月号に委員長と報告者二人が書かれた記事は市民との問題共有に役立つと思います。

3)院生・若手の参加

今回、取り組みの段階からこれまで以上に若手の問題を重視し、実行委員、報告者に院生に入っていました。全部で10名の院生の参加がありました。現実には厳しいが、困難に立ち向かうのは一人ではないことを若い方たちに知っていただけたと思います。

4)男性の参加 一般参加者88名中男性は25名。文部科学省からの2名の参加など、いろいろな立場の方がいらしたと思いますが、感想文には、女性の抱える困難が良く分かったと書いてくださった方もいます。

5)全国シンポの名に相応しいか

この点では、今一步と思います。シンポが名前通り全国的なシンポになるためには、JSA全国幹事の方々のさらなるご協力が必要と思います。

6)その他 戦争法案に反対のアピール、要望書を出しました。

*クララ・ツェトキーン：ドイツ生まれの女性運動家(1857-1933)

(石渡真理子 女性研究者・技術者委員会副委員長、
実行委員会事務局長、東京支部常任幹事)

2-3 実行委員からの一言

①シンポジウム委員長を引き受けて

今回のシンポの実行委員長のお話きたとき、私は、「なぜ私のところに?」「私は何を要求されているのか?」を考えました。そして、「きっとやる人がいないのだろう。それに何か新しいことを期待されているのかもしれない」とも思いました。それにしても、定年退職後6年がたって、現場感覚の賞味期限が切れたはずの私に何か勘違いして依頼してきているのではないかと疑いました。考えられることは、在職中、私が「教え子をたくさん研究者に育てあげた」らしいこと、退職後、ライフワークの研究を意外に早く切り上げて、「単著をだし学会賞を貰った」らしいとの噂で「きっと、時間的に余裕ある筈」と思われたか、とも勘ぐりました。しかし私は、研究者・地域の活動家としてはまだ現役で多忙です。まあ、「とにかくやってみよう」とお引き受けしてしまいました。

私はこれまで、学会開催校責任者をはじめ、代表を務めたりしたメイン学会の社会政策学会、似たような経験の日本家政学会と女性労働問題研究会、また、日本学術会議の旧研究連絡委員とそのNGOたるJAICOWSの事務局担当など経験してきたので、そうした経験が役にたつだろうし、半年くらいすぐ終わるだろうとも思ったのです。それでどうだったかは、私はこの間JSAのいろいろのものに書き、この特集にも、皆さんがお書きになっている通りです。

実行委員長とは、演出家・指揮者・監督のようなものです。丁度日本の岐路ともいうべき

山場の時期にやってよかったと思っています。半年は瞬くに過ぎ去り、やり終えた今、この歴史的時期に責任を果すことを考えれば、JSA の新女性委員会への提案が三つあります。一つは、まずそれぞれの支部で、JSA 女性会員比をだし、分野別に全国に積み上げてデータベース化し、次回の女性シンポまでを区切りとした数値目標を立てて日常活動をする必要があるということです。二つは、今回のシンポで、女性新入会員を多数迎えました。その方たちに JSA の、他学会とは異なる魅力、他学会では得られない「入ってよかった」を実感できる活動を追求・創造すべきということです。三つは、JSA の精神、歴史、今日の国際・国内的課題を把握した、女性会員の研究や実践の成果を、広く世に発信するということです。私も一員として今後も参加し続けることをお約束しての提案です。

(伊藤 セツ 第 14 回女性研究者・技術者全国シンポジウム実行委員長)

②午後のプログラムから

私は、この度、JSA 第 14 回女性研究者・技術者全国シンポジウムの実行委員に加えていただき、当日は報告者の皆さまの切実な思いと熱気あふれる充実した時間を過ごす機会をいただきました。ここでは、午後のプログラムの概要を報告します。なお、本来ならお一人お一人のご報告の内容についてご紹介したいところですが、報告者が 8 名と多く、内容も多岐に渡ります。そのため、詳細は刊行予定の報告集に譲りたいと思います。

午後のプログラムは、大きく三つのセッションに分かれています。その第 1 は、「女性研究者・技術者をとりまく困難と、その解決を目指す取り組み」と題されるもので、女性研究者に関わる諸運動(選択的夫婦別姓制度・打越さく良さん、大学院生問題・佐藤和宏さん、大学非常勤講師問題・松村比奈子さん)に取り組む 3 人の方に、ご報告いただきました。第 1 のセッションで、女性研究者をめぐる基本的な問題点が共有された上で、第 2 のセッションは、「困難を克服して進む若手女性研究者」というテーマで 3 人の方の個人的なご経験に基づく事例をご報告いただきました。いわゆる「専業非常勤講師」や任期付の助教などの経験を経て、現在専任の大学教員のポストに就いていらっしゃる 3 人の方(蓑輪明子さん、杉橋やよいさん、吉田仁美さん)に、ポスドク時代の困難とそれをどのように克服なさったか、という内容です。第 3 のセッションは、「退職後の女性教員—インタビュー調査から」とのテーマで、分野横断的に実施された、退職された女性研究者 15 名へのインタビュー調査の概要が報告されました(横田綾子さん、登谷美穂子さん)。

(小尾晴美 大正大学非常勤講師)

2-4 参加者感想

①初参加者から

第 14 回女性研究者・技術者全国シンポジウム「市民とともに社会を変える女性研究・技術者」が、去る 6 月 14 日、東京において 116 名の参加者のもとで開催された。

実行委員長の伊藤セツ氏(昭和女子大学名誉教授)は、「安倍政権の『女性が輝く』という掛け声の背後で、戦後例をみない歴史の修正や民主主義の危機に直面している。しかし、反戦平和、脱原発、基地反対等の市民運動の高まりにより、今日も午後からは国会包囲に駆けつけるという方もおられる。今ひとり、女性研究者・技術者の問題であるばかりでなく、男女を問わず市民全体が置かれている困難の根源と共通している問題であり、市民とともに社会

を変える、自らを変革の主体としてエンパワメントすることが重要だ」と述べられ、シンポの位置付けが確認された。

基調講演では、朴木佳緒留氏(神戸大学名誉教授)から、今日的情勢とともに国立大学での女性研究者支援事業の成果やご自身の男女共同参画室長時代のエピソードも交え、課題提起がなされた。「世界的に観て圧倒的に遅れている、本学の男女参画」という可視化しやすい数的データによる実態把握すら、日本全国の大学の12%ほどでしかなされていない。現実的にはもっと「見えないこと」がある。たとえば、管理職として重責を担う自身に対して、娘を案じる父親は、「ほどほどにしておきなさい」と。もし息子にであったなら、「健康に留意してしっかりやりなさい」といったのではないか。女性がリーダーになっても、褒め・励ますメッセージがないという環境、「善意によるジェンダーの再生産」が存在する。このような側面に気付き、発信をし続けること、そして男女参画によって「地位が能力を作る」という実績－女性リーダー育成の必要性があること等、展望を見出すための提起があった。

午後からは、研究者を目指す大学院生、若手研究者、障害のある研究者、非常勤講師、シニア世代の研究者、弁護士など、様々な立場から自身の経験や調査結果をもとにした実態分析と、女性研究者・技術者のライフステージ上で直面する法制度の問題など、盛り沢山の報告と全体討論がなされた。

女性研究者・技術者という問題にも多くの切り口や個別的側面を含有している実態があること自体は想像がつくが、現実的な問題・困難性に対する閉塞感ばかりが先行してしまうことにもなりかねない。本シンポジウムを通じて、女性研究者の先輩方や若手研究者、非常勤講師組合等の取組みの一端を知ることができた。世界史的な位置という観点をふまえ、今日の政府施策の背景を捉えながらも、その施策をより積極的な中身づくりにつなげ、変えていく展望を共有しながら、ともに発信し取組み続けることの大切さを再認識した。

(渋谷光美 大阪支部)

②男性参加者から

6月14日、日本大学歯学部で標記の全国シンポジウムが開催されました。シンポジウムの「市民とともに社会を変える女性研究者・技術者」というテーマに研究者の男女格差の問題は女性全体の問題と密接に繋がっているというメッセージを感じ取り、内容に期待して参加しました。

シンポジウムは伊藤セツさんの実行委員長挨拶でスタート、続く朴木佳緒留さんの基調講演では、男性社会である大学の中での奮闘、大学教職員・研究者の男女間格差の問題や課題を周りに意識させていくために行うべきことと、そして結実した成果が大変解り易くまとめられ、目の前の課題に対してどのように取り組んで克服していけば良いかを示唆する素晴らしい講演でした。

午後は、実際に女性研究者・技術者が置かれている厳しい現状の報告が続き、男性視点では窺い知れない、また考えが及んでいなかった報告内容に対して少なからず衝撃を受けましたが、その後、様々な困難に直面しながらも現実に向き合っそれを乗り越えて研究者としての道を進んでいる方から実例を交えた報告があり、困難ではあっても克服できる道が示されたことには私も元気づけられました。

最後に、基調講演での朴木さんの「大学教授の女性比率が大変少ないことは、研究室の女性

学生・研究者からすると努力しても教授になれないことを毎日見せられているのと同じ」という言葉は大変印象深く心に残りました。
(石山 修／東京支部常任幹事)

③院生から

将来安定した職に就けるのか、貸与制奨学金を返せるのか、子どもは望めるのか、多くの女性研究者が考えるような不安を抱きながら、昨年、私は大学院進学を決めました。しかし、茨の道を覚悟していたとはいえ、今回語られた現実には正直、少し尻込みしてしまいました。朴木教授によれば、「男性領域」である研究者の世界に女性が入って行って関係を築くのは、認識レベル(意識や物の考え方・受け止め方)における男女差ゆえに相対的に難しく、自然と男性優位な構造が作られてしまう、ということでした。大学にはそのような「見えないジェンダー問題」がたくさんある、というお話を聞いて、問題の根深さを感じました。また、非常勤講師時代は、“昼食すらろくに食べられないほど超過密スケジュールだった”、“雇用を確保するためには弱みを見せずに猛烈に従順に働かざるを得なかった”、という大学の「ブラック企業」的実態にも衝撃を受けました。「厳しすぎる…」閉会直後はそんな思いでいっぱいでした。研究者を蔑ろにするような政策に対して怒りを覚えつつも、研究者の世界に足を踏み入れてまだ2か月半、「研究テーマどうしよう?」と悩んでいる私にとって、「女性研究者を取り巻く現状をどうやって変えていくか」という議論は壮大で途方もなく感じました。しかし、今の私には途方もないことでも、当事者の一人として、自分たちの置かれている現状や不安を共有し、悩み、解決策を模索する場にいることはとても大切だと思いました。その意味で、今回この企画に参加できたことはとても貴重だったと思います。次回の女性シンポには、女性以外のたくさんの方が参加し、問題を共有できればいいなと思いました。

(中央大学院生 仲地 二葉)

3 第48期 第2回女性研究者・技術者委員会 議事録

① 日時・場所 2015年3月28日(土)13:00~15:00 JSA全国事務所

② 出席者(敬称略・順不同)

沢山美果子(委員長 岡山)、石渡真理子(副委員長 東京)、長谷川千春(京都)、今枝暁子(HP、ML 東京)、池上幸江(東京)、河野貴美子(担当常任幹事 東京)、奥村美紗子(担当常任幹事、東京)、渋谷光美(大阪)、中村寿子(ニュース 大阪)

③ 定期大会議案の確認

- ・48期活動報告と2015年方針：沢山委員長、石渡副委員長を中心にネットで議論。内容を確認。
- ・委員会名の統一 「女性研究者・技術者委員会」「・」を入れる。

④ 2014年度の活動について

- ・女性委員会増員(東京 奥村さん、大阪 渋谷さん、三重 栗屋さん)
- ・第13回全国女性研究者・技術者シンポジウムアウトライン決定。位置付けは、本委員会が企画、実行委員会が準備・運営を行う。本委員会終了後、実行委員会に出席する。
- ・決算：学術体制部予算は100%消化。女性シンポ報告書を含む書籍・執筆料抛出等によるプール金で補って2回の委員会開催。プール金 残40,000円は全国シンポジウムに使う。

⑤ 2015年度の委員会活動・予算について

- ・次期委員長の選出について、「ジェンダー」の研究者、大学での女性登用に係る業務等の経験者を中心に複数の方に打診する。
- ・若手に事務局長として日常の実務を行ってもらおう。
- ・全国大会後、女性委員会を1回開催する。
- ・ニュースは第13回全国シンポ特集として初秋に発行する。

⑥ 女性委員会の今後の方針について

- ・若手の意識と感覚を組み上げた活動を取り入れる。
- ・女性研究者の現状を踏まえた議論が必要である。
「日本の科学者」女性特集で科学的裏付けが必要と認識で来た。
- ・以前、女性研究者育成に関わる制度について、アンケートを実施して多くの大学から回答を得た。現在の文部科学省の政策による現状と近年の変化、問題点と課題を再度把握し、JSAの活動に生かすため、アンケートを実施する。
- ・男性研究者の問題、社会全体の問題とリンクさせた考察・研究を行う。
- ・地方の女性会員に、委員、連絡員に誘う。女性研究者・技術者にJSAへ加入を促す。
- ・委員会開催費節約のために、スカイプ等を用いたネット会議を検討する。この課題はJSA全体のテーマとして検討してもらおう。（文責 中村）

4 各地・各分野の話題

留学生が見た沖縄—平和を考える旅

4月28日から5月7日にかけて、十日間の沖縄フィールドワークに行ってきました。平和と自由とは何か、国家と家族とは何かについて少しわかるようになりました。「戦争のこしらない」世代である私、基地反対運動をずっと頑張ってきた人々に一層深く理解できました。

中国の反日宣伝の大きな影響の下、「戦争反対運動をする人は、よその国を侵略した歴史があるからだ。」「われわれの戦争は自分を守るための正義の戦いだ。」と考えている中国人は少数ではありません。現在、積極的に戦争への道を選らんだ日本政府の政策と比較してみれば、戦火に焼かされた沖縄大地の人々は米軍と国に自由を奪われ、それに対して平和運動を選びました。その大きな違いによって、私は沖縄の人々の意識の高さに驚きました。東アジア全体の平和への道は、もしかして沖縄から開かれるのではないだろうかと思いました。

沖縄から帰ってきて、平和のために自分のできることは何かについてずっと考えていました。そして、中国と日本、中国とモンゴルの間の架け橋に慣れたらいいなと思いました。架け橋になるには、自らの「常識」というものであらゆることを判断するのではなく、すべての相手の文化を尊重し、心からそれを理解しようとする姿勢を出すべきだと思いました。

(アルス 大阪支部)

シンポジウムの詳細は、10月末に刊行予定の報告集をご覧ください。頒価1000円+郵送料の予定です。予稿集も再掲予定。詳細は<http://www.jsa-tokyo.jp/woman/>で。

申し込み先: Joseishinpo_jsa.josei@jcom.zaq.ne.jp

〒113-0034 東京都文京区湯島1-9-15 茶州ビル9F

日本科学者会議東京支部 第14回女性研究者・技術者全国シンポジウム実行委員会